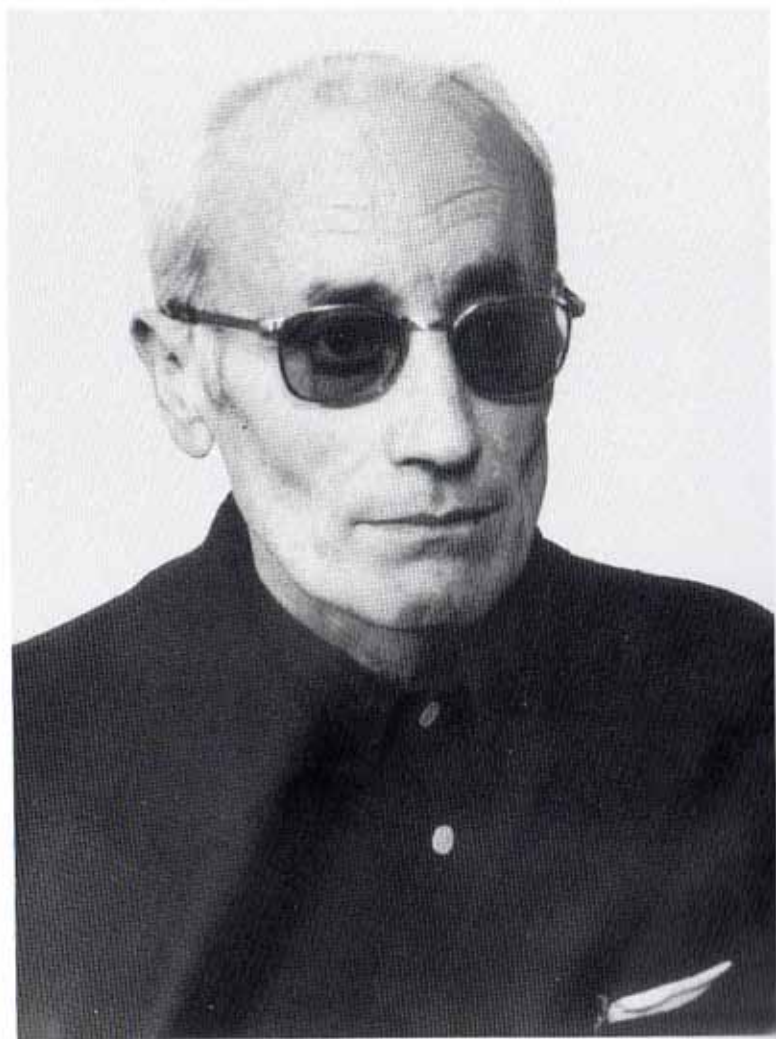


訳者あとがき

本書は Joxe Azurmendi: EL HOMBRE COOPERATIVO, — Pensamiento de Arizmendiarrieta, 1984, 〇一
部訳である。原書は八〇〇頁を超える全一〇章からなる大部の本であり、本書はそのうち、原著者の了解を得て、
特に重要と思われる序章、第二章、第八章及び第九章の一部を訳出したものである。他の章もいずれもモンドラ
ゴン協同組合の生成と発展に関して興味ある内容ではあるが、モンドラゴン協同組合複合体の運営上の問題点、
経過などについては、すでにいくつかの本も出版されており、最新の研究も進んでいるので、原著の全訳につい
ては、いずれ出版の機会を待つことにした。

原著はスペイン・バスク地方のモンドラゴン協同組合複合体の創設者であるホセ・マリア・アリスメンディア
リエタの思想と理念を追跡したものであり、協同組合の運営や歴史そのものを主題にしたものではない。一体に、
協同組合運動を論じる場合に、その運営制度、経済体制に議論と関心が集中しがちであるが、社会思想及び哲学
的な側面の説明も必要なことである。原著はモンドラゴン協同組合複合体の誕生の理念的背景を探ったものであ
る。アリスメンディアリエタの死後、大きく発展した協同組合群を背景に、ミネルバのふくろうは飛び立ったの
である。

アリスメンディアリエタはいわゆる体系だった思想家ではなかった。彼は、歴史や生産の理論の哲学的分析か
ら始めたのではなく、人格の具体的な哲学的概念から始めた。デカルトが言うように、現実という大きな書物を



J・M・アリスメンディアリエタ

読むことから彼の思想は出発したのである。彼の教育は神学校から始められ、そこでフランス人格主義哲学の影響を強く受けた。スペイン内戦前の神学校時代に、バスク文化復興運動のアカデミーに彼は参加した。

スペイン第二共和制の動きの中で、社会思想においては自由主義と集産主義（コレクティビズム）の台頭は著しく、共和制の中で特に経済制度としての協同組合または集産体が、カタルニアやバスク地方に多くつくられた。当時、社会主義者プリエトの主宰するビルバオの新聞の秘かな読者でもあったアリスメンディアリエタは、すでに、ブルジョア的リベリズムや全体主義的傾向をもつ集産主義に替わる第三の選択肢としての協同を、バスク独自の社会主義の道として考察していた。

一九〇〇年代初期のヨーロッパの思想状況は、左右を問わず西欧の没落という意識に捕らわれていた。シュペングラーやオルテガなどにみられるように、国家の解体の危機意識は、大衆社会の出現に対する不安という形で現れた。こうした雰囲気の中でアリスメンディアリエタはムーニエやマリタンを読んでいる。バスクのカトリック教会は、スペインカトリック教会がフランコ寄りであったのとは対照的に、フランスカトリック人格主義の社会観と人間観を評価していた。内戦後、フランコ側の「カトリック擁護のための戦争」たる内戦の規定をアリスメンディアリエタは認めなかった。フランコ独裁政府は労働組合をすべて廃止し、垂直型労働組合をつくり、イタリアファシズムの経済協同体を育成した。労働者の権利を代表する組合はなくなった。したがって、モンドラゴンにおける労働者の運動もまた、カトリック青年行動団などの活動の中でおこなうしかなかった。アリスメンディアリエタのモンドラゴンでの司祭としての仕事は容易なものではなかった。

彼は、キリスト教的自由主義を私的所有を神聖化する考えだとして、人間性・労働者・貧乏人を無視するものとして反対した。一方、集産主義については、個的所有の全面的廃止を主張するものとして、これにも反対した。

當時は一般に、集産主義的傾向はファシズムと「共產主義」の主張とみなされていた。

アリスメンディアリエタは、所有概念について、共同所有の概念はマルクス主義の特許ではなく、教会の発生そのものがその考えに基づいて組織されているのだとみなした。一九四五年から五〇年の時期には、彼は、イギリス労働党の政策に共感を覚えたが、国家の問題についてはまだあまり考えていなかった。所有の解決が共同的所有にあると思いつめてからは、彼は所有と労働の概念について考察を始めなければならなかった。

バスク地方の伝統的な経済特権をフランコにより剝奪されて以来、バスクでは社会主義とナショナリズムへの関心が強まった。国家と社会（共同体）についての彼の実践的な結論は、既存のスペイン国家は労働者階級の解放に役立たないということであり、スペイン国家は絶対主義国家として、生産手段を資本家が独占し、公共資産を金持ちのために使い、公衆のために使わない、すべてを特権層のために収奪する吸収的国家であるということであった。しかし、結局のところ国家論については、協同組合の側面から眺められただけであまり深まらなかったといつてよいであろう。

アリスメンディアリエタは、労働の概念について真面目に考察を加えた協同組合主義者の一人である。マルクスの『資本論』の中の「イギリスの工場法における教育」を引用して、教育と労働を一緒におこなうことが将来の教育の在り方であると主張した。労働者の解放は労働者の人間としての尊厳の獲得であり、労働による解放であり、労働による人間の自己実現である。そのための教育もまた自主財政により自主管理によらなければならない。また、文化の社会化、知の社会化こそが労働者が権力の民主化を勝ち取る道であり、文化のブルジョア的独占を阻む道であると主張した。教育の欠如が、社会変革において暴力的解決へ向かわせるものとアリスメンディアリエタは考えた。こうした視点から、当時、青年たちの労働外の余暇の在り方を重視し、文化サークル、スポー

ツサークルを多く組織し、合唱団、音楽、民族舞踊、各種スポーツを振興した。青少年に対する教育を彼はカントの理念即ち、人間は教育によって人間になるという理念に基づいて進めた。さらに、彼は、「全ての人は他人に教えるべき何かをもっている」、「各人はその可能性に従って要求し、その必要性に応じて与えられる」という原則をとった。確かに、現実には、この原則は適用されることがないにしてもこうした理念を目指して実践を企てることが、何よりも彼の優れたところであった。彼にとって教育とは協同精神の現れであった。

アリスメンディアリエタの労働概念は、極めてキリスト教的なものを含んでおり、労働とは仁愛であり創造者であり、神との協同であった。労働は本来的に責苦ではなく、神と人間との信頼の確証であると述べている。人格に関して、アリスメンディアリエタは「労働のみが人間の性格を変える」ものだと考え、不変の人格性を信じなかった。「労働は人間化の要素であり、労働の社会化の中で人間を変革するものである」と言っている。アリスメンディアリエタは所有概念を常に労働の義務と結び付けていた。「共産主義」は所有権を否定するために、資本主義は資本の労働に対する優越原則をもつために、いずれも彼は賛成しなかった。労働者全員が資本と所有の権利をもつこと、労働と所有の分裂を終わらせることが協同組合的所有の目的であると彼は考えた。しかし、彼はこれを出発点として考えたに過ぎない。彼は、労働の人間化と労働の効率化の両立を考え、生産性と連帯を結び付けて考えた。アリスメンディアリエタの連帯の規準は具体的なものであった。まず、地域共同体との連帯である。それは仕事をつくり出すことと、同一賃金を目指すことに現れた。また、彼はバスクへの流入労働者については直接論じてはいないが、外来者と土着住民のいずれもがバスク国民を構成するのだと述べている。逆に、彼は、スペインからのヨーロッパ各国への移民労働者についても関心をもっていた。また、女性の社会参加について、労働の場が不足していることを論じ、「婦人に自らの運命を決めさせよう」との意図の下に、女性労働者協同

組合アウソラゲンを設立したのは、一九六八年であった。

アリスメンディアリエタの優れたところは、労働者階級は自己を管理し自由な人間的活動をおこなうために、教育を通じて十分成熟した状態になり得るのだと考え、参加がその保障であると考えた点である。多くのその他の労働者生産協同組合主義者と彼の異なる点は、資本主義における分業による疎外の危険を認識する一方で、労働の分割による積極的側面、即ち、分業により労働共同体の絆、効率、進歩、連帯が生まれ、労働の創造的性格により個人の労働が共同体の創造的主体となると考えた点である。そして、連帯に関しては、職人的手工業や友愛についてのノスタルジーをセンチメンタルなものとして排除して、工業・大工業への生産の移行を主張した。手作業機械が封建領主の社会をもたらし、蒸気機関が資本主義社会をもたらしというマルクスの言葉を受けて、アリスメンディアリエタは技術発展と社会組織形態との関連を明確に意識していた。彼の考えは、労働者が生産財を所有することが必要であるということであった。当初、アリスメンディアリエタはモンドラゴンの企業主たちの協力を得ながら、技術学校をつくったが、生産協同組合をつくっていく過程の中で、資本主義企業自体の変革は、当時の時点で非常に困難であることを感じた。その結果、労働者自らが自主管理、自主財政化を進め、資本への参加を果たすことを目指した。

過去の生産協同組合が何故失敗したのかという点について、アリスメンディアリエタは、それは管理・モラルについて考え抜かれておらず、物質的・構造的支えが十分でない安易なヒューマニズムの誘惑に陥ったからだと言っている。彼は、協同組合企業存続のための資本化に注目し、技術者や専門家を協同組合に定着させるための優遇措置の必要を主張した。後期産業時代・技術時代の現代においては、労働者は自らを市民階級として理解しており、労働者の闘争は物取りの要請ではなくて参加である。「今日の革命は参加という名前である」とアリスメ

ンデイアリエタは言っている。

協同組合主義は、人間的社会的価値意識とその要請の実践的適用の統合である。人間が人間となるために必要な選択肢たる教育・労働・健康と平和活動に自ら参加するための組織的過程であり、道徳的価値に従うものである。現代は広島核エネルギーから出発して、人間が自らを類的存在として初めて連带的に存在しなければならぬ時代である。

こうしてみると、アリスメンデイアリエタの協同の原則の基礎には、次のものがあげられる。(1)キリスト教理念。(2)人格主義的人間の概念。(3)技術学校設立時の経験。(4)現代世界についての危機意識。(5)マルクス主義的労働概念(自然・素材変換による人間の自己実現としての労働)。(6)技術の発展と社会化の肯定的評価。(7)労働者の意識の発展についての肯定的評価。

アリスメンデイアリエタは連帯を主張したが、これは単に共生感を味わうものでも安易な道徳でもなかった。連帯は人々の協同と連合のために自己犠牲を要求するものであった。具体的には、利益追求及社会の中で、生産性や利潤・賃金分配において全体のために寄与することである。協同組合における労働者のモラルと可能性への信頼、経済発展・社会進歩の担い手としての労働者の成熟への確信、享受を待つのではなく、根本的に与える側に変わるための経済的文化的活動の重要性が連帯の目標であった。労働の機会均等、文化の機会均等、健康的な生活の機会均等について、それぞれ工業協同組合、教育文化連盟、社会保障協同組合がその担い手として位置付けられたのである。

実のところ、当初、アリスメンデイアリエタの中にあつたものは、協同組合をつくろうというのではなく、労働の共同体という漠然としたものであった。しかし、当時の労働大臣のデル・アルコなどの法律的助言により、

結果的に協同組合を選択したのであった。協同組合設立にあたって、アリスメンディアリエタが条件として想定したのは、(1) グループの基本的技術能力。(2) どの分野を労働対象として選択するのか。(3) 法的な保障制度であった。第二点については、協同組合が向かない分野として、いわゆる基幹産業、さらには職人労働分野で、これは狭い枠での教育しか可能でないとし、加工・製造業が向いていると考えた。また、生産協同組合の規模については、大量生産工程が不可避と考えていた。生産協同組合は小さく狭い範囲でのみ可能だと考えられがちだが、大量生産システムこそが生産性の高水準の獲得を可能にすると彼は言っている。しかし、技術だけでは労働における参加と人間化を獲得することはできない。ここに彼にとって、人間中心の協同組合の社会的性格が強調されなければならない理由がある。労働の分割あるいは分業の問題は、エンゲルスの言うような、朝に狩りをし、昼には魚を採り、夕には家畜を飼い、夕食の後には批判をする可能性は彼岸にあるものとしても、此岸においては分業の解体を夢想するよりも、諸個人の自由意思的な分業の協同こそが、労働の分割による疎外を廃棄するものであろう。専門化は個人にとって必要であるが、調整・管理労働が排他的な部門になることは諸個人の間では排除されるべきである。

協同組合の陥り易い危険として、彼は次の点をあげている。(1) 管理能力のある人間の欠如している協同組合。(2) 労働の科学的組織的法則に挑戦できない協同組合。(3) 単なる熱意を、資本や技術や先見性の適切な処理と取り違えている協同組合。(4) 労働の適切なプログラムのない、また安易で性急な事業の幻想を抱いている協同組合。(5) 連帯意識のない協同組合。アリスメンディアリエタは、労働者と企業家であるという二つの資格は、本来、精神と肉体のように不可分に結び付いているとして、指揮と協同、実践と管理は同一の人物の中で結合されていなければならないと言っている。彼は、労働者が企業家であるために必要な特性として、危険に対応する

能力、再投資意欲、決断力をあげた。勿論、これは孤立した個人の特性としてではなく、企業共同体の一員としての労働者企業家の特性である。アリスメンデイアリエタは個人主義を未成熟な印であり、「小児病」とみなしていた。彼は言う「今日、労働者は成熟しており解放されるべきことを明確に意思表示しなければならぬ。まだ未熟だとか準備不足だとか言って遅らせるわけにはいかない。労働は常に現実的な印であり、陣地なのである」。また、管理についても管理労働として位置付け、強力な自治と実行に際しての絶対的独立性、権限の代表性、情報の上下の相互伝達・公開、さらに官僚主義を避けるための管理者の定期的交代を提案している。交代は専門化と効率の原則と衝突するが、しかし、彼は解決可能とみていた。効率とヒューマニズムという矛盾する要素の解決に取り組まなければならないと考えた点が彼の優れた点である。

彼は、一九六〇年代のバスクにおいて、資本主義に対する闘争の形態は、労働者階級において労働組合、政党組織、協同組合の三つの分野の協同により、労働者階級の解放が可能だとした。協同組合に対する左翼からの批判は、彼をして所有や労働などの基本概念の検討に向かわせ、結果として、階級なき社会をつくろうという目標を確認させることになった。六〇年代の新左翼との論争は、新しいバスク民族主義の台頭とも関連して、アリスメンデイアリエタをして再びナシヨナリズムに目を向けさせ、バスク亡命政府と接触させることにもなった。当時、モンドラゴン協同組合に対して、バスク民族問題に無関心だという非難、フランコ体制の送り込んだトロイの木馬だという非難、社会主義だという非難、バスクの特殊現象だというような様々な非難や憶測がなされた。フランコ政府によるバスク語使用禁止が解除されてから、一九六八年以降、アリスメンデイアリエタは機関誌「T U・労働と団結」にバスク語でも書き始め、協同組合の経験とバスク民族主義を結び付けて論じ始めた。彼にとつて協同の精神は、人間の超越的存在としての神学的使命とも一致し、また、バスク人民の伝統と精神の体現でも

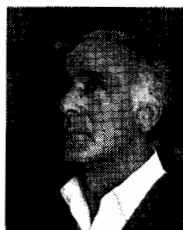
ある。バスク人民の力は労働により、労働と団結により自由を得ているというものである。彼は、協同組合をバスク独自の社会主義モデルと理解した。人間の顔を持った社会主義。知の社会化なくしては自由も民主主義もない。政治権力の奪取のみを目指した瞬間的な革命は危険であるばかりでなくファシズムにも接近すると彼はみていた。

アリスメンディアリエタの言う「新しい体制」とは、自由主義や集産主義に対する協同組合的社會主義を示すものである。協同組合は資本主義体制の対立物として資本主義が生み出したものである。彼は、協同組合主義は民主的管理により、効率という点でも資本主義を克服できるとした。とはいえ、彼は非人間的な吸収的国家を批判したが、国家そのものを批判したのではない。大規模分野や不活発部門については国有化を肯定した。ただし、国家は企業のイニシヤチブに干渉すべきでないとした。彼はフランスの人格主義哲学者と同様に、階級闘争の存在を認めていた。彼にとって、協同組合は文化革命でもあったが、しかし単に倫理要請の対象ではなく、歴史的発展の産物であった。協同組合が資本主義を乗り越えて新しい体制をつくれるかどうかについては、労働者階級が団結しなければならぬと彼は述べるとともに、同時に資本主義との共存も受け入れなければならないとも述べている。こうして「新しい体制」のために、協同組合における教育は、協同組合が硬直しないこと、社会変革を目指し、自治社会へ向けて教育を進めることである。知の社会化は、新しい人間社会への行為の社会化に変わらざるを得ない。「進歩的に団結した人民の力で人民は立ち上がる。誰も従者でもなく主人でもない。全ての者はすべての者のために、われわれの力を新しい内容でおこなわなければならない」と、アリスメンディアリエタは述べている。

アリスメンディアリエタの提起しつくりあげた協同組合複合体は、労働と所有、企業の資本化、投資、民主的

運営・管理のシステムについて、人間の尊厳を前面に押し出しつつ、現実の資本主義・社会主義経済システムの研究を踏まえながら、大胆に労働者階級が自主管理の責任を請け負えるという確信に立って進められたものである。これは彼が言うように出発点であり、普遍的モデルではない。しかし、特殊性の中に普遍性が示されるのである。

翻訳にあたっては、立命館大学の佐藤誠氏には何度も合宿をするなどして、訳文検討をいただいた上に、さらに論文をいただいた。また、明治大学の中川雄一郎氏にも適切な論文をいただいた。原著者の友人であられる長野カトリック教会のザベリオ・イドヤガ神父には字義上の多くの教唆をいただいた。勿論、翻訳上の責任は訳者にある。本書は、みんけん出版の鈴木哲氏の全面的支援なしには実現しなかつたものである。本書の出版にご尽力いただいた全ての皆様に改めてお礼申し上げたい。



著者紹介

ホセ・アスルメンディ (Joxe Azurmendi) は、バスク・ギブスコア県のモンドラゴンからほど遠くない場所に、1941年に生まれた。当時は、アリスメンディアリエタが青年労働者たちの教育者として、その公的活動を始めた時期にあたる。アスルメンディはイタリア、西ドイツに学び、哲学博士号を取得。現在は、サン・セバスチャンにあるバスク国立大学の現代哲学史の教授。

本書は、モンドラゴン協同組合の理論的推進者であり実践的導き手であったアリスメンディアリエタの思想について体系的な分析をおこなった最初の研究書である。アスルメンディは、アリスメンディアリエタのばらばらになっていた文書や著作の整理にあたり、未印刷の全集を取りまとめた。同時に、アリスメンディアリエタの文書を3冊のアンソロジーにまとめ出版した。アスルメンディにはさらに、協同組合主義やヨーロッパの労働運動に関するいくつかの論文がある。本書は数年にわたるこれらの研究の成果である。

アスルメンディは、バスク現代史における社会思想に特に文化的関心を持ち、研究をすすめている。マルクス主義、社会主義、キリスト教人間主義思想に関する論文多数。